

ふるさと歴史館第15回企画展

少年・少女がみた戦争



平成 30 年

8 月 1 日

▶ 10 月 28 日

月曜休館 (祝日の場合は翌日)



入館無料

展示解説 8 月 15 日 (水)

午前 10 時 30 分～



石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社 1-2-10

石岡小学校敷地内

電話 0299-23-2398

①～⑨ 今泉義文撮影 (『写真集いしおか昭和の肖像』より)
⑩～⑪ 平成 29 年度 第 3 回中学生平和大使

少年・少女がみた戦争

■目次

はじめに	1
I 中央滑空訓練所	2
II 大日本滑空専門学校	3
III 石岡海軍航空基地	4
IV 戦争と学校	7
V 8月15日	9
VI 73年後の少年・少女	10
展示品一覧	12

■例言

本冊子は、平成30(2018)年8月1日～10月28日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第15回企画展に際して作成したものです。

展示および本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課（谷仲俊雄）が行いました。

展示にあたっては、以下の文献をはじめ、多くの文献を参考にいたしました。

写真にみる石岡の昭和史研究会『写真集 いしおか昭和の肖像』1995年

屋口正一『半ノ木讃歌』櫻水物語刊行会，1998年

野田礼子『戦争の記憶—土浦ゆかりの人・もの・語り』

土浦市立博物館テーマ展，2015年

小又法子『海軍航空隊の記憶—百里原海軍航空隊から予科練まで—』

展示解説書，小美玉市玉里史料館，2015年

■謝辞

以下の方々・機関にご協力いただきました。ありがとうございました。

平成29年度第3回石岡市中学生平和大使

平成30年度第4回石岡市中学生平和大使

茨城ビデオパック ， 小美玉市玉里史料館 ， 防衛研究所戦史研究センター ，

法政大学史委員会 ， 石岡市立中央図書館

岩崎 真也 ， 北口 由望 ， 斉藤 保次 ， 田口 雅勝 ， 田村 登 ，

和久 法子 ， 金子 隆哉 ， 高橋 真希 ， 田上 秀之

○平和は「信頼」から始まります。「信頼」を得るために一人一人が自分にできる身の回りの平和を築いていくようにします

○「争い」というものは二者の対立から起きます。対立を起こさないために「思いやり」の心をもって相手と接していくようにします

○自分の弱さを隠すために「暴力」を振るうようなことはしません

○あたりまえに過ごせることの大切さや家族、友達、人との関わりを大事にします

○どんなことでも感謝の言葉を相手に伝えるようにします

○友達やクラスの中での小さな平和を大切にして、いじめや差別をなくします

昨夏、市内の中学生を代表して「中学生平和大使」として長崎市を訪問した 12 人がまとめた平和宣言文です。太平洋戦争では、石岡市でも 2,000 人を超える戦没者をはじめ、多くの人々が犠牲となりました。市内半ノ木には、「東洋一の訓練所」といわれた滑空機（グライダー）の訓練所が開設され（中央滑空訓練所）、併設の専門学校（大日本滑空工業専門学校）には、大空への夢を抱いた少年たちが集っていました。しかし、戦局の悪化とともに、予科練の訓練施設として使用されるようになり、米軍からは「石岡飛行場」として攻撃目標とされていました。また、市内石岡には海軍の航空基地が急造されました（「石岡東飛行場」）。これら飛行場では、多くの少年たちが訓練を積み、戦場へと旅立っていきました。また、飛行場の建設作業はもちろん、工場労働や農作業には、少年・少女たちが動員されていました。

今回の企画展では、少年・少女たちが学び、訓練を積み、あるいは動員された戦争遺跡や関連資料を展示・紹介するとともに、現代の少年・少女一「中学生平和大使」の活動を紹介いたします。終戦から 73 年を迎える今夏、戦争と平和について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

東洋一の訓練所

昭和16年6月7日、石岡市半ノ木(現在の法政大学石岡総合体育施設)で「中央滑空訓練所」の開所式が行われました。滑空機とは、「グライダー」とも呼ばれ、動力を持たずに気流を利用して飛ぶ航空機。上昇気流が発生しやすい地形から石岡市はスカイスポーツのメッカですが、当時から好条件のため、注目されていたようです。

中央滑空訓練所は、帝国飛行協会(昭和15年10月より大日本飛行協会)によって、滑空の指導者養成の施設として建設されました。教官には滑空界の第一人者を揃え、充実した施設、各種訓練機を備えた「東洋一」の訓練所でした。

中学校の先生をはじめ、国内はもとより満州などからも選抜された人々が集まりました。軍隊式の日課にしたがって訓練が行われ、規定の訓練を修了すると、滑空士の資格が取得できました。卒業生たちは出身地に戻り、後進の指導教育にあたりました。



▲訓練所の開所を伝える記事

『滑空日本歴史写真輯』昭和18年, 航空時代社
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

明治神宮国民体育大会の開催

明治神宮国民体育大会は、大正13年より開催されている内務省(のちに厚生省)主催の総合競技大会で、現在の国民体育大会創設にあたり、大きな影響を与えた大会です。

昭和16年開催の第12回の明治神宮国民体育大会より、新たな2種目が追加されました。そのうちの1種目が、「滑空訓練」です。そして、その開催会場として選ばれたのが、開所まもない中央滑空訓練所でした。

10月30日、全国より約300人の選手が石岡に集まり、石岡高等女学校(現在の石岡二高)、石岡国民学校(現在の石岡小)に宿泊しました。11月1日の大会当日には観覧者が数万人集まり、「当町未曾有ノ盛況」であったと記録されています(『昭和16年石岡町事務事業報告書』)。

翌昭和17年の第13回大会も中央滑空訓練所で開催されました。前年を上回る約400人が出場し、陸軍音楽隊の演奏会や演奏行進も行われ、三笠宮殿下が台覧されました。



▲明治神宮国民体育大会の開催を伝える記事

『滑空日本歴史写真輯』昭和18年, 航空時代社
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

日本初の滑空専門学校

昭和19年3月10日、「大日本滑空工業専門学校」の設立が認可されました。滑空と銘打った日本初の単科専門学校です。定員50人に対し、志願者は439人。受験資格は中等学校4年修了以上で、16歳の少年たちです。

5月1日に入学式、6月4日に開校式が阪谷講堂で行われました。第1回入学者は53人。大空への夢を抱き、難関を突破した少年たちが全国から集まりました。

教授陣は航空界の第一人者たちで、専任教員のほか、



兼任教員が東京から泊りがけで来校し、講義を行いました。滑空の訓練も週2回行われ、夏季には鹿島灘で合宿訓練が行われる充実ぶりでした。

また、若松町(現在の府中中の場所)には、滑空機の製作工場が建設されました。石岡は滑空機の製造、訓練、教育が揃う滑空界のメッカに発展しました。

◀ 大日本滑空工業専門学校の資料 (法政大学史委員会提供)



▲大日本滑空工業専門学校の校舎と講堂
(法政大学史委員会提供)
右の三角屋根の建物は、帝国飛行協会前会長の阪谷芳郎男爵にちなみ「阪谷講堂」と呼ばれた。竜神山麓の竜ノ口からも見えたといひます。

軍事拠点に一石岡飛行場 Ishioka airfield

日本への空襲が本格化した昭和19年になると、予科練や予備学生などの訓練が行われ、海軍の一翼を担うこととなります。そのため、米軍からは“石岡飛行場 Ishioka airfield”と呼ばれ、攻撃目標のひとつとなりました。

“石岡飛行場”への米軍の空襲は、昭和20年2月16～17日から始まりました。なかでも7月4日の機銃掃射では、大日本滑空工業専門学校1年生1名と、中央滑空訓練所に派遣されていた海軍の予備学生1名が犠牲になってしまいました。

大日本滑空工業専門学校では、施設や飛行機が被害を受けたうえ、勤労働員や連日連夜の空襲警報のため、昭和20年になると、授業はほとんど実施できなくなっていたようです。



保次 羽田分遣隊 飛行時代 学校記念
▲中央滑空訓練所に派遣された隊員の集合写真
齊藤(旧姓須藤)保次氏提供。齊藤氏(左写真)は予科練卒業後、霞ヶ浦海軍航空隊の羽田分遣隊に入隊。実施部隊配属前の予備訓練として、昭和19年9月頃中央滑空訓練所に派遣。滑空機「力」で訓練を受ける。右写真は、訓練最後の日に「力」とともに撮影。



急造された航空基地

国道6号線の石岡市役所入口交差点の水戸寄りにある中古車展示場やカラオケボックスから、北側へと1km以上にわたって延びる直線道路があります。これが航空基地(飛行場)の滑走路の痕跡になります。

昭和20年8月に調査された「海軍航空基地諸元調査表」によれば、昭和20年8月建設で未使用。主任務は空廠整備、飛行場は芝張で規模は1,200×300m、半地下兵舎1,800㎡、掩体は工事中とされています。

しかし、『昭和19年石岡町事務事業報告書』によれば、同年6月以降、毎月100人の勤労働員が行われていることから、遅くとも昭和19年6月には建設が始まっていたようです。また、基地に隣接する石岡農学校(現在の石岡一高)には、昭和20年3月頃より海軍「燕部隊」が駐屯し、校舎は兵舎として提供されたことから(『石岡一高史 I』昭和61年)、この頃には完成していたと考えられます。



▲試製基地要図第三(関東地方)
防衛研究所図書館史料閲覧室蔵
(『茨城県の近代化遺産』2007年より)

飛行機と掩体壕

基地には、百里原海軍航空隊の艦上攻撃機「天山」の部隊が派遣されていました。また、終戦時には、零式艦上戦闘機11機、九九式艦上爆撃機2機、練習機「白菊」1機(奥羽海軍航空隊所属)が残留していたとのことで、「白菊」を除き、実戦機が配備されていたのがわかります。

配備された飛行機は、空襲から守るための施設「掩体壕」に格納されていました。現在も残っているものは3基だけですが、米軍が戦時中や終戦直後に撮影した空中写真を見ると30基以上確認できます。いずれもコ字形に土を盛っただけのもので、上空からは丸見え。上は木や草で覆いをかけるだけで、屋根(蓋)のない「無蓋掩体壕」でした。掩体壕は、それぞれ100m程の間隔で配置され、滑走路との間には誘導路(運搬路)がつくられていました。このような整備の仕方は、空襲による飛行機の損害を防止するために昭和19年に定められた『築造施設教範』に準拠したものといえます。

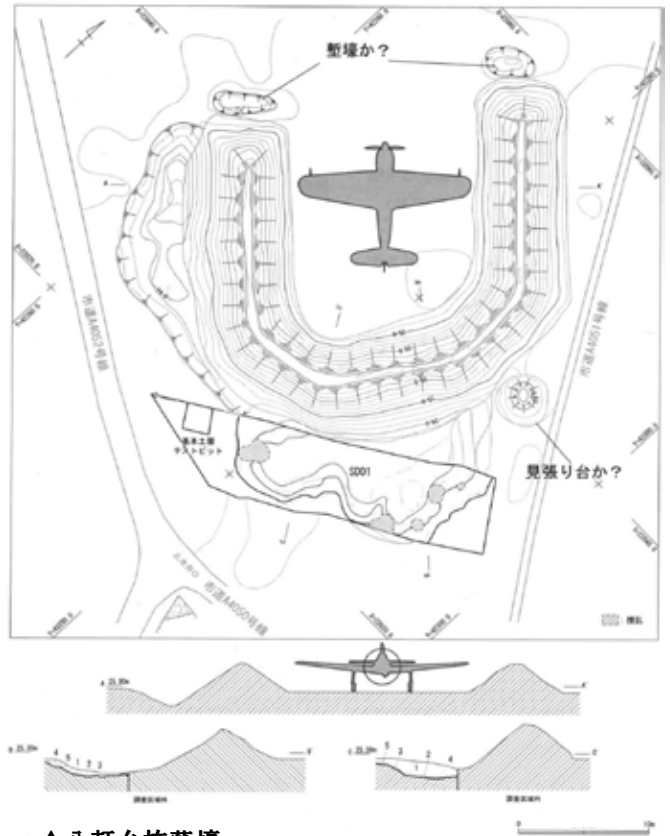
米軍からは、“石岡飛行場 Ishioka East airfield”と呼ばれ、半ノ木の中央滑空訓練所(“石岡飛行場 Ishioka airfield”)とは区別されていたのがわかります。

終戦直後の掩体壕には、零戦62型(胴体下に爆弾を吊るせるように改造したもので、特攻機として使用されることもあった)や木製の**おとり**機、多数の機銃と弾薬、部品、軍需品が保管されていたとの証言があります(屋口正一2014「霞ヶ浦周辺旧海軍施設の消滅」『CROSS T&T』48)。

発掘調査された掩体壕

平成26年6月、東大橋のJAホールひたち野の北側に残る掩体壕(八軒台掩蔽壕)の測量調査と発掘調査が行われました。コ字形をした飛行機を1機格納するタイプのもので、格納部の幅は約15m、奥行は約17m。終戦時に残されていた零戦のような小型機は十分格納できる大きさです。しかし、土手の部分の高さは2.4mほどで、飛行機を隠蔽、防御するには不十分な印象を受けます。また、平面形は左右非対称で、平行四辺形状に歪んでいます。また、周囲の「周掘部」と呼ばれる部分は、土を取るためだけに掘ったというような乱雑な作りでした。

建設には住民や学生が動員されていました。しかし設計者はプロであり、軍が指揮監督したはず。完成形の正確さ、きれいさよりも、労働に伴う精神的一体感の醸成のようなものが優先されたのでしょうか。



▲八軒台掩蔽壕



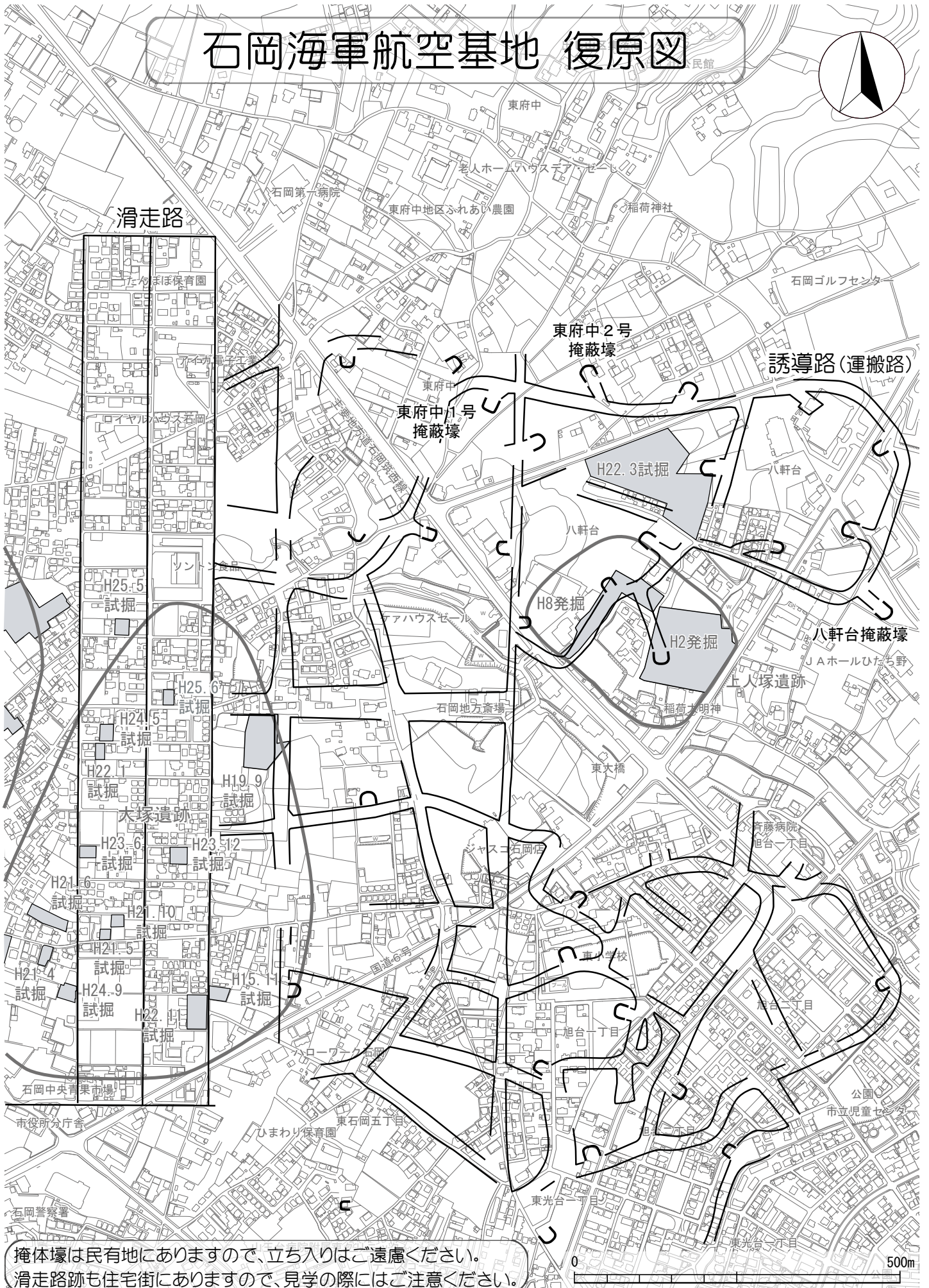
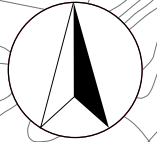
◀東大橋 JA ホールひたち野の北側に残る掩体壕(えんたいごう)

飛行機を隠すため2.4mほど土が盛られています。しかし上空から丸見えのため、葉っぱや木で飛行機を隠しました。



掩体壕の「周掘部」の発掘調査の様子▶
奥に見えるのが掩体壕

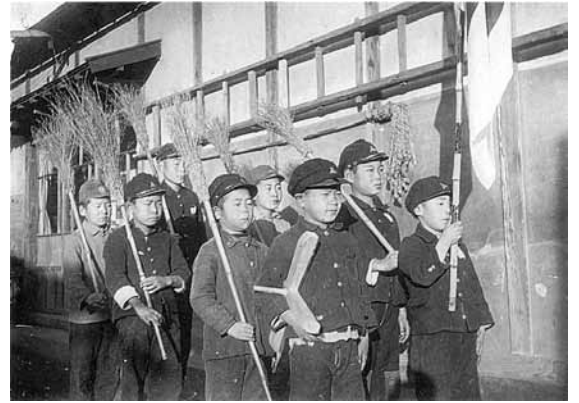
石岡海軍航空基地 復原図



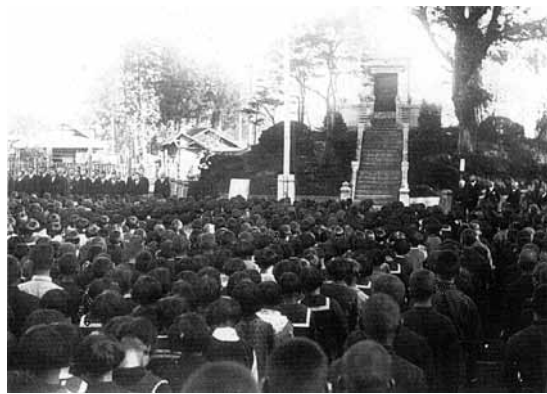
ほう あん でん 国民学校と奉安殿

昭和16年、小学校は「国民学校」と改称されました。子どもたちは「少国民」と呼ばれ、基礎的な軍事訓練が行われるようになるほか、出征兵士の見送りや戦勝祈願、勤労奉仕なども学校行事として行われるようになりました。また、戦地へ慰問文を送ることも大切な役目とされました。

国民学校での教育の基本とされたのは「教育勅語」で、天皇皇后両陛下の写真(御真影)とともに「奉安殿」に収められていました。火災や地震から守るため、各学校で校舎



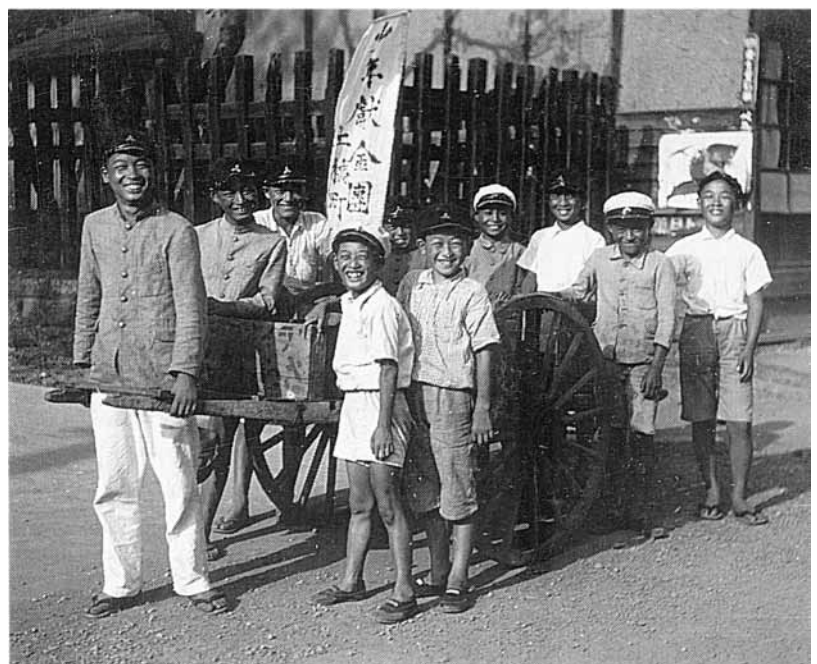
▲清掃も軍隊行進 (現在の石岡小でのひとコマ)



とは別に、コンクリートなどの耐火耐震構造を用いて建設されました。昭和10年頃に建設されたものが多いですが、柿岡第二尋常小学校(後の片野小)では昭和4年に建設され、八郷地区での奉安殿建設の最初とされています。

奉安殿は天皇陛下の教えを収める神聖な建物であり、登下校の際は、脱帽、最敬礼して通るのが習わしでした。

◀石岡国民学校 (現在の石岡小) にあった奉安殿



(左上) 日の丸を振って戦勝を祝う

(左下) 奉仕作業に向かう

(上) 土橋町の少年献金団

(今泉義文撮影/石岡市立中央図書館蔵)



勤労働員—学びたくても学べない

戦争が拡大するに伴い、労働力が不足するようになります。石岡農学校(現在の石岡一高)では、授業は「教練」と呼ばれた軍事訓練中心になります。中央滑空訓練所や石岡海軍航空基地の造成作業に動員されたほか、昭和18年には県内各地の援農作業や軍用道路建設作業にも動員されました。昭和19年には2年生が北海道での2か月間の援農作業に従事、20年になっても、2年生の北海道援農は続き、校舎も大部分が海軍に接收されてしまいました。



▲石岡農学校生徒の勤労奉仕

石岡高等女学校(現在の石岡二高)でも、勤労奉仕、軍人援護等の行事が次第に多くなり、昭和19年には3・4年生が日立の工場へ動員されます。20年、日立の工場が空襲を受けたことから、工場は石岡高等女学校へ疎開します。

勉強よりも戦争に協力することが優先され、学びの場は崩壊、生徒は労働力として扱われてしまいました。



◀勤労奉仕へ向かう石岡高等女学校の生徒

石岡駅に着く

昭和19年8月、石岡駅に東京から子どもたちが到着しました。本土空襲が激しくなるなかで、東京都墨田区の第四吾嬬国民学校と向島曳舟国民学校の子どもたちが石岡に疎開してきたのです。子どもたちは、橋本旅館や稲吉屋、香取屋、亀下旅館、吉野、東耀寺、国分寺で集団生活をはじめました。

9月には新宿区の戸山国民学校の子どもたちが到着。柿岡の常林寺や善慶寺、如来寺、片野の浄土寺へと分かれ



▲石岡駅に到着した第四吾嬬国民学校の子ども

ました。しかし、石岡も次第に空襲の被害を受けるようになり、墨田区の子どもたちは秋田県へ、新宿区の子どもたちは群馬県へ再疎開となりました。

石岡駅に着いたのは、子どもたちだけではありませんでした。意気揚々と出征していった兵士の無言での帰還。昭和6年以降の戦没者は、石岡地区で1,081人、八郷地区で1,001人を数えます(没年不詳を含む)。



▲英霊の写真と涙の再会

空襲

石岡市における空襲は、昭和20年2月頃からはじまりました。当初は、中央滑空訓練所・大日本滑空工業専門学校（“石岡飛行場 Ishioka airfield”）や石岡海軍航空基地（“石岡東飛行場 Ishioka East airfield”）中心でしたが、7月頃になると、アルコール工場（現在のピアシティ石岡）や石岡駅、石岡農学校（現在の石岡一高）、石岡国民学校（現在の石岡小）、そして市街地にも被害が出るようになります。



▲石岡駅のホームの柱（個人蔵）

指でさしているところに、機銃掃射の弾痕が残っています。

なかでも7月28日は、石岡海軍航空基地、アルコール工場、石岡駅を中心に広範囲にわたり、激しい攻撃を受けました。石岡駅では列車や建物も銃撃を受け、職員が犠牲になりました。また、石岡方面へと向かっていた蒸気機関車も北の谷町付近で機銃掃射を浴び、機関士が犠牲となってしまいました。

8月13日も早朝から攻撃を受けます。前日夜、大阪から弾薬を積んだ貨車が石岡駅に到着していました。機銃掃射を浴び、積んでいた弾薬にも火が回ってしまい、爆発。その破片は、1km以上先まで飛散しました。昭和35年頃の常磐線電化工事では砲弾の破片が出てきたと言われており、平成28年2月に石岡駅工事中に発見された不発弾もこの砲弾の可能性ががあります。

8月15日早朝

8月15日早朝、米軍は石岡を攻撃します。米軍の記録（米軍戦略爆撃調査団報告）によれば、航空母艦ベントンを4時25分に離陸、百里原海軍航空隊の攻撃を目的としていました。百里原攻撃後、「4機の単発機を写真に見ることができる石岡東飛行場を偵察。パイロットは霧のため、敵機を確認するに至らず、8発のロケット弾を発射したが、成果は確認し得なかった」とあります。その後、“Asahi”と“Saruta”の間で列車に攻撃。8時30分に母艦に戻っています。

そして、この日の正午、玉音放送が流れ、太平洋戦争は終戦を迎えました。

米軍が撮影した石岡海軍航空基地 ▶

昭和20年8月13日米軍撮影

（米軍戦略爆撃調査団報告、国立国会図書館デジタルコレクションより）
掩体壕に隠された飛行機や、攻撃を受け炎上している飛行機が見える。この偵察をもとに、8月15日早朝の攻撃が行われました。



私たちの平和宣言

終戦から73年が経ちました。戦争を体験した方々のお話は貴重なものとなりました。

石岡市では、平成27年度から中学2年生の生徒代表者を広島市や長崎市に派遣する「平和大使派遣事業」を実施しています。各校男女1人ずつが選ばれ、昨年は8月8～10日に長崎市を訪問。原爆資料館を見学、平和祈念式典に参列しました。冒頭で紹介した「平和宣言文」は、長崎市で学んだことを言葉にして伝え合い、それらをつないで



▲長崎市での献花・千羽鶴献納



▲石岡市戦没者追悼式での発表

ひとつの宣言文にしたものです。市役所での報告会のほか、各校の文化祭や石岡市戦没者追悼式、生涯学習の集いで発表を行いました。新たな「語り部」の誕生です。

今年の平和大使は、広島市を訪問。7月23日に結団式を行い、8月5日に出発。平和祈念式典への参列のほか、原爆ドーム見学、平和祈念制作活動への参加等を行います。また新たな「語り部」が誕生します。



◀平成 29 年度第 3 回石岡市中学生平和大使



平成 30 年度第 4 回石岡市中学生平和大使▶

石岡市中学生平和宣言文 2017

今から72年前の夏、昭和20年8月。雲の切れ間にのぞむ青空の下、広島そして長崎に原子爆弾が投下され、まもなく日本は終戦の日を迎えました。

たった一発の原子爆弾は罪もない何千、何万の人々の命を奪いました。そして、生き残った多くの方々は、今なお被爆による後遺障害と悪夢のような戦争の記憶に苦しめられながら生活しています。

私たち中学生にはリアルな「戦争体験」がありません。生まれた時から目の前に「戦争のない暮らし」がありました。ですから、あたりまえの大切さに気付くことができないのです。

しかし、私たち12名はこの夏長崎市を訪問し、戦争と平和について多くの学びを得ることができました。世の中には平和を強く願う方々がたくさんいることも知りました。そして何よりも、今のあたりまえの日常が多くの先人の方々の犠牲と苦勞の上に成り立っていることを目と耳と心で実感して帰ってきました。

私たちにできることは何なのか。ただ「平和が大切だ」「戦争はあってはならない」ということではなく、自分たちで身近にできることを考え、行動に移すことが必要だと考えました。




そこで、私たちは平和についての考えや思いを「石岡市中学生平和宣言2017」としてまとめ、発信することにしました。


- 平和は「信頼」から始まります。「信頼」を得るために一人一人が自分にできる身の回りの平和を築いていくようにします
- 「争い」というものは二者の対立から起きます。対立を起こさないために「思いやり」の心をもって相手と接していくようにします
- 自分の弱さを隠すために「暴力」を振るうようなことはしません
- あたりまえに過ごせることの大切さや家族、友達、人との関わりを大事にします
- どんなことでも感謝の言葉を相手に伝えるようにします
- 友達やクラスの中での小さな平和を大切にして、いじめや差別をなくします

感謝の気持ちをもって、皆で笑い合える今を大切にしながら、平和を守り、伝えていくという大切な使命を果たすことをここに宣言します。

平成29年度 第3回石岡市中学生平和大使 派遣生一同

展示品一覽

	展示品名	時期	写真	所有者
1	「三つのグライダー」 『写真週報』第186号 (複写)	昭和16年9月17日 発行		国立国会図書館 デジタルコレクション
2	石岡滑空工業専門学校訓練生の演練 『読売ニュース』 (複写)	昭和19年6月21日 発行		法政大学史委員会
3	「文部省告示第461号」 『官報』第5170号 (複写)	昭和19年4月11日		国立国会図書館 デジタルコレクション
4	昭和19年石岡町事務報告書			石岡市
5	「霞ヶ浦周辺旧海軍施設の消滅 —史実・石岡航空基地の例—」 『CROSS T&T』第46号, 総合科学研究 機構	平成26年2月28日 発行		石岡市教育委員会
6	統制陶器 (神栄製糸工場跡出土)	昭和16~20年		石岡市教育委員会
7	米軍戦略爆撃調査団戦闘報告 (昭和20年8月15日)(複写)	昭和17年(1942) 11月初版発行		国立国会図書館デ ジタルコレクション

8	兵器施設備品引渡目録 (①引渡目録-404-0723) (複写)	昭和20年8月31日		防衛研究所 戦史研究センター
9	航空隊引渡目録 (①引渡目録-156-0010) (複写)			防衛研究所 戦史研究センター
10	土居良三編 『学徒特攻 その生と死』 国書刊行会	平成16年9月27日 発行		個人

石岡市立ふるさと歴史館第15回企画展

少年・少女がみた戦争

平成30年8月1日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195 石岡市柿岡5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016 石岡市総社1-2-10

TEL 0299-23-2398